貴重資料紹介（17）

北京版西蔵大蔵経の請来

礪 波 護（教授・東洋史学）

寺本婉雅が本学に寄贈した清朝の〈勅版〉『北京版西蔵大蔵経』は、その影印版の刊行が、チベット研究の発展に大きく貢献したとして、世界の東洋学界で極めて有名である。

大蔵経の開板は、漢文であれ、チベット文であれ、あまたの経論の翻訳事業、写本の集大成、分類目録の編纂といった過程を要するので、永い歳月を経過したのちに、ようやく実現されるものである。

経・律・論の三蔵からなる漢文大蔵経の場合、漢訳事業は２世紀後半から始まり、目録の編纂は４世紀末に道安によって開始され、唐の開元18年（730）の智昇撰『開元釈教録』に至って、大蔵経に編入すべき仏典の総数が5,048巻と確定した。ただし当時、木版印刷の技術は発明されておらず、大蔵経の最初の開板は、北宋の太祖の開宝年間から蜀で雕造され、みやこ開封の宮中に造られた印経院で印刷された勅版で、開宝蔵と称される。宋による正法流布の功徳事業だったので、西夏・高麗・日本などの近隣諸国に贈与された。

漢文大蔵経は、南宋の思渓蔵・磧砂蔵、元の普寧蔵、明の万暦版方冊蔵経などが開板されたが、いずれも勅版ではなかった。勅版としては、国都を南京から北京に移した明の永楽帝による大明北蔵と、清の雍正帝によって始められ、乾隆３年（1739）末に完成した、精密に校訂された大清龍蔵7,938巻がある。

チベット大蔵経の編集と開板については、御牧克己「チベット語仏典概観」（『チベットの言語と文化』冬樹社、1987年）と今枝由郎「チベット大蔵経の編集と開版」（岩波講座〈東洋思想〉第11巻『チベット仏教』1989年）およびツルティム・ケサン（白館戒雲）「チベット大蔵経とその影響」（成田山新勝寺『法談』第47号、2002年）が詳しい。

甘殊爾第62筴・賢劫経

チベットでは、仏教の前期伝播期とされる吐蕃の時代、８世紀に仏典のチベット語への訳経が国家的事業として始まり、仏典目録は『デンカルマ目録』が最初である。９世紀半ばに、吐蕃が分裂・崩壊するに伴って、仏教も衰退したが、後期伝播期である10世紀後半からは、仏典翻訳事業がつづき、その集大成として、14世紀初に、現存チベット大蔵経の原型、『旧ナルタン大蔵経』が成立する。

チベット大蔵経は、経・律・論の三蔵からなる分類ではなく、カンギュル（甘殊爾。仏説の翻訳）と、テンギュル（丹殊爾。注釈書の翻訳）という、二部に分類された。漢文の『大正新脩大蔵経』と比べると、カンギュルは第１巻から第24巻までの経と律に該当し、テンギュルは第25巻から第32巻までの論に該当する。すべてがインド撰述部で、第33巻以下の論書や注釈は蔵外文献である。ナルタン寺で編集・分類された『旧ナルタン大蔵経』

につづいて、シャル寺でプトンは目録を完備させた。これらの大蔵経や目録はすべて写本であった。木版印刷本はチベット本土ではなく、北京の地で、明の永楽帝による永楽８年（1410）開板のカンギュルが最初であり、テンギュルについても清の雍正帝による雍正２年（1724）開板のが最初で、いずれも〈勅版〉であった。

元朝の成祖フビライは、至元22年（1285）に慶吉祥等に詔して、「西蕃大教目録を以て、東土経蔵と対勘し」、すなわち西蔵文大蔵経と漢文大蔵経とを勘同した上で、『至元法宝勘同総録』10巻を編纂させた。

中国社会科学院民族研究所の蔵族史研究組組長の黄顥は、『在北京的蔵族文物』（民族出版社、1993年）の「二十五、《至元法宝勘同総録》と北京版蔵文大蔵経」で、つぎのように指摘する。《至元法宝勘同総録》は、詔を奉じて元のみやこ大都で、漢人・チベット人・ウイグル人などの多民族の僧人が協同して勘同し完成させたもので、６名のチベット族が参加した。この勘同こそ、元の天子の詔勅をうけて実施された漢文と西蔵文との二種の文字による大蔵経の経目を確定するための国際学術会議だったのである、と。

ラマ僧が大活躍した元代の北京で、西蔵大蔵経の経目は検討されたが、開板にまでは至らなかった。この時点では、チベットにおいても『旧ナルタン大蔵経』は出来ておらず、勘同に用いられた西蔵大蔵経がいかなる系統のものであったかは、確認できない。この勘同総録は、『大正新脩大蔵経』では第55巻の目録部に未収録で、別巻『昭和法宝総目録』の第２巻に収録されている。

西蔵大蔵経が、チベットではなく、明清の北京で最初に開板されたのは、チベットでは写本を重要視する伝統があったことと、モンゴル王朝の元のみならず、明清の宮室と政府が、信仰と統治策の両面でチベット仏教を極めて重視した結果である。明清の宮室がいかに蔵伝仏教に傾倒したかについては、佐藤長「明廷におけるラマ教崇拝について」（『鷹陵史学』第８号、1982年）と故宮博物院主編『清宮蔵伝仏教文物』（紫禁城出版社・両木出版社、1992年）が詳しい。

つぎに本学所蔵の『北京版西蔵大蔵経』が寺本婉雅（1872―1940年）によって請来された経緯について述べよう。寺本が、明治33年（1900）、義和団事変に陸軍通訳として従軍し、事変の余燼くすぶる北京北郊、安定門外の黄寺と資福院に詣で、義和団に掠奪破壊された上、酒色と財宝のほかは全く関心のない欧米の兵士によって放置されていた〈西蔵大蔵経〉二揃いを発見し、昵懇になっていた清の慶親王の好意で購入（実は清朝皇室への功労の恩賞として受贈）、山口素臣師団長の協力をえて日本に輸送した詳細は、横地祥原が編集した寺本『蔵蒙旅日記』（芙蓉書房、1974年）によって、初めて明らかになった。横地は、附録に寺本「西蔵一切経総目録序」を収録するとともに、〈跋〉の中に未定稿の「西蔵大蔵経将来の顛末」を抄出している。

江本嘉伸『能海寛チベットに消えた旅人』（求龍堂、1999年）の「第十三章　義和団事件とチベット大蔵経」や、最新刊の奥山直司『評伝河口慧海』（中央公論新社、2003年）も、『蔵蒙旅日記』を大いに活用している。

江本を代表とする日本人チベット行百年記念フォーラム実行委員会編『チベットと日本の百年』（新宿書房、2003年）の中で、明治のあの時期にどうしてチベットに急に仏教者たちが動いたのか、その辺りの背景が何だったのか、と質問する江本に対して、山口瑞鳳は「あの時期にみんな忽然として行くようになった一番大きな影響力というのは、東本願寺の小栗栖香頂が書いた『喇嘛教沿革』という本ですね」と答えている（61頁）。

小栗栖香頂（1831―1905年）は、豊後、妙正寺の住職で、明治の初年に北海道開拓を建白、また中国布教の先陣をきった人物で、北

小栗栖香頂『喇嘛教沿革』自筆稿本（左）と刊本（右）

京では雍和宮のラマ、トンコル・フトクトに学び、明治10年（1877）に出版した『喇嘛教沿革』こそ、日本最初のチベット学の著作と目される労作である。刊本は京都の鳩居堂で印刷され、序文は同志の石川舜台（1842 ―1931年）が書いている。大谷派の僧侶の能海寛と寺本が中国経由でチベット入りを計画したのは、単なる偶然ではなかったのである。

寺本は能海と二人でチベット東部の巴塘に滞在すること50日、西行を阻まれて、1899年（明治32。光緒25）10月１日に退却し、再挙を期す能海と打箭炉で別れ、重慶で越年し、翌年４月に神戸に帰着する。時あたかも中国では、義和団運動が拡大して、北京の公使館区域を包囲する事態になり、８月中旬に日本を含む八カ国連合軍が北京を占領、義和団は壊滅し、光緒帝は西太后とともに西安に蒙塵する破目になる。帰国して間もない愛知出身の寺本は、東本願寺の推挙で広島第五師団の通訳官として従軍することになり、出発。進駐軍の通訳僧として雍和宮のラマ僧たちに信頼され、また清の皇室に出入し、醇親王を始め慶親王らと親交を深め、西太后の持仏堂の勤行にラマ大衆とともに出入して宮中の枢機の宦官等と往来し、また光緒帝と西太后を北京に還御させるために西安に到るといった、八面六臂の活躍をしたのである。

寺本婉雅の厳父が調整した「西蔵探見往来文軸」の抄録が『蔵蒙旅日記』に附録され、その中の《五師団司令部証明書》には、

右ハ通訳服務ノ余暇　東本願寺ヨリ　西蔵経典研究ノ依托有之候者ニ付西蔵経典ノ目録調整ノ為メ便宜ヲ与ヘラレ度候也

追而本人ハ軍隊精神教育ニ関スル法話ハ各隊ノ請求ニ応ズル筈ニ付申添候

明治三十三年九月十七日

第五師団　司　令　部　印

とある。寺本は「西蔵一切経総目録序」などにおいて、この証明書の御蔭で西蔵語研究の自由特典を得、その因縁によって拝領した無上大宝の聖典を輸送できた、と特筆する。

寺本が黄寺で入手した西蔵大蔵経は、永楽版の甘殊爾部を万暦帝のときに覆刻したもので、日本の皇室に献上された後、東京帝国大学図書館に保管されたが、残念なことに関東大震災で焼失したそうである。

真宗大学（今の大谷大学）図書館に寄附した西蔵大蔵経は、資福院より入手した方で、甘殊爾部106筴、この外に甘殊爾部の目録、蔵文と漢文の１筴であって、丹殊爾部は252筴（宗喀巴全集20筴と章嘉全集７筴を含む）。その他、西蔵語蒙古語を雕刻した方形あるい

漢蒙文の版木
（資福禅院の名が見える）

は円形の版木20枚等を寄附した。その甘殊爾部は、康熙帝の康熙23年（1684）８月23日付の「御製番蔵経序」をもち、31年に完成した勅版を、康熙56年（1717）から59年にかけて覆刻したもの。丹殊爾部は雍正帝の雍正２年（1724）閏４月24日付の「御製続番蔵経序」をもつ勅版で、従来の丹殊爾部の外にツォンカパの百千法語集とチャンキャの百千法語集とを増補編入して、仏寺に集大成し、顕密遺漏なからしめんとする。ナルタン版とデルゲ版には、この増補はない。一面八行で朱字で印刷され、装訂も豪華・美麗である。

資福院は、『宸垣識略』に康熙60年に康熙帝の万寿を祝福して建てられ、帝によって命名された、と記されていた。『在北京的蔵族文物』の「三十二、清浄化城塔と資福院」によると、蒙古のラマ僧が駐錫する蔵伝仏教寺院で、北京北郊の徳勝門外の黄寺大街にある西黄寺の西側にあり、黄教布教の拠点として建立され、今は某軍事機関の駐地である。

寺本は、西蔵大蔵経の発見から入手までの間に、清国慰問使として来た連枝大谷瑩相、南条文雄、法宝物係の白尾義夫に、全蔵を実見してもらっている。大蔵経入手後に木材を調達し、工匠を督して経箱を造り、軍の輸送船に託して日本に送附した。郷里にはこれだけ厖大な聖典を保存する書庫がなく、本人は再度入蔵の目的があったので、帰朝するまで浅草別院の大草慧實輪番に保管を依頼した。大草が東京巣鴨に開校なったばかりの、真宗大学図書館長の月見覚了に交渉して、同図書館に保管され、寺本の帰朝後に寄贈される。

昭和30年（1955）から36年にかけて、鈴木大拙発願の『影印北京版西蔵大蔵経』全168巻が近代的書物の体裁で無事に刊行され、海外にも需要を充たした。この大事業の監修者の代表は、寺本にチベット語を学んだ山口益（1895 ― 1976年）で、本学の学長であった。『蔵蒙旅日記』の序文で、山口は次のように記す。日本の学界で西蔵語が始めて学科目に加えられたのは、大正４年（1929）で、京都では大谷大学と京都大学文学部とであった。そして両大学における西蔵語の講義は寺本によって開講され、寺本を教壇に迎えたのは南条文雄と榊亮三郎とであった。京都における西蔵語学は寺本請来の『北京版西蔵大蔵経』によって培われた。寺本後半生の苦労は、若い学徒にその厖大な西蔵大蔵経研究の関心を惹き起こさせることに費やされた、と。

寺本婉雅『蔵蒙旅日記』